

天下の事は机の上の
耕田

どうかまじれない
耕治人

そうかもしれない

一九八八年四月二〇日 第一刷発行
一九八八年九月二〇日 第五刷発行

著者——耕^{こう}治^{はる}人^と

© Koh Yoshi 1988, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三十三 郵便番号 三三〇一 電話 東京 三三—九四—二二（大代表）
印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一七〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書出版部宛にお願いいたします。

■ 目次 ■

そうかもしれない 5

どんなご縁で 53

赤い美しいお顔 95

そうかもしれない

題字・装画 中川一政

そうかもしれない

一

入院したところは上の入れ歯と下の入れ歯をかみ合わせると、飛び上るほど痛かった。それで痛み止めの薬を貰い、食事の三十分前飲んだ。

食事は三度とも流動食だ。ご飯は汁のようなおかゆだ。担当のS先生は、だんだん固くしてゆく、おかずも固いものに変えてゆくから、といわれたが、体は衰えてゆくばかりのように思われた。

そんなある日S先生は診察室（処置室）で、私の足許に体重計をおき、のるように言い、針をさし、四十キロを割ったから、体力をつけるため、鼻から栄養を入れ

ることにする、といわれた。

ベッドのわきに金属製の棒を立て、それに栄養の入ったビニール（？）の袋をぶら下げ、それに管がついていて、その管は、鼻を通っている管と、つながりようになっている。

そんなわけで洗面所やトイレにゆくときなど、管を外し、栄養が管から漏れるのを防ぐため蓋をするのであった。

そんな日がどれ位続いたろうか。このあいだ毎日診察室で、口内の治療を受けたが、そんなある日手術の代りに、放射線治療を受けるため、地下一階に通うことになった、とS先生から告げられた。

手術には六時間か七時間かかるが、副作用の心配があるから、とのことだった。私は八十一歳になり、体力も衰えているから、手術は止めて貰いたかったのだ。

「車椅子でゆくし、看護婦が附添ってゆくから、心配いりません。一週間ばかり経つと、口のなかがざらざらになり、唇は乾いてくるが、頑張ってください」

次の日鼻に管をつけたまま車椅子にのり、エレベーターで地下一階に降り、ガラス戸を押し、廊下を右に折れた受付で、看護婦さんは、病棟と私の名前を言った。

そして、

「治療がすんだら、ナースステーション（看護婦室、相当広い。看護婦さん達の入りが激しい。）に、電話をください」それから私の方を向き、「電話があったら、迎えにきますからね、心配しないで、待っていてください」

言い置き、帰っていった。

長い廊下の、壁に添ったソファと椅子は、患者さんで、ほとんどふさがっている。

私は急に心細くなった。

江古田の、BMホーム（特別養護老人ホーム）にいる家内が、ふいに浮んだ。

家内がそこへ入居してから、三月と十日になる。

私がかみから近い田畑耳鼻咽喉科医院へ通い出したのは、家内が入居してからだ。

田畑先生は厄介な病気だから、一日も早く大学病院へ入院するように言われたが、いろんな事情から、家内の入居より、ずい分遅れ、田畑先生のご紹介で、西新宿にあるこのH医科大学病院の、耳鼻咽喉科に入院したのであった。

入院するまで私の家から歩いて十五分位のそのホームへ時々見舞いにいったが、

入院してからは会っていない。

しかし時たま私の見舞客から、家内の様子を聞くことがある。先週の土曜、私と家内が媒妁したYさんの奥さんが来られた。奥さんはだいたい毎土曜顔を出されるが、私のところから、BMホームへ廻ることがある。先々週私のところから、そっちへ廻ったとき、ちょうど昼飯どきで、テーブルに向い、二十人ばかりのお年寄りが食事をしていた。家内もそのなかにいたので、Yさんは家内のそばの椅子にかけ、家内の様子を見ていた。家内の方はYさんが誰であるかわからない。(私はそう思っていた。)家内の前の皿には、むしろ焼魚やきいかなが盛ってあった。家内はそれを見な食べたというのだ。

Yさんの奥さんは先週の土曜来られたとき、先々週みたことを話し、「普通の家庭ではなかなか出来ませんわ」と繰り返した。魚をむしろであったのは、家内の皿だけだったから、奥さんの注意をひいたのだろうと私は思った。

家内が呆けてから、ホームに入居するまで、三度の食事は私が作ったが、夕食のためマーケットから、焼魚を買ってくるがあった。家内は東北の、日本海に面したN町で生れ、育ち、子供のときから、魚をよく食べた。好きでもあった。

私は焼魚をそのままテーブルに並べないで、骨と身をわけ、身だけすすめた。

しかし入居する前あたりは、ちょっと箸をつけるだけで、みな食べたことはなかった。

私が骨と身をわけたのは、家内に入れ歯がないからでもあった。どういうわけか呆けてから、自分で入れ歯を外し、隠すようになった。気になるので探して渡すと何日かしてなくなっている。度々繰り返すうち、我慢出来なくなり、怒鳴ったら、なにもいわず、いきなり引抜くように外すと、一問ばかり先にあった円筒形の屑籠にパツと投げこんだ。私は度ぎもを抜かれた。

それまで固定するため歯科医院へ連れてゆかねば——と思っていたのだが、それから入れ歯のことにはふれなくなった。

しかし入れ歯がないまま入居したことが、いまでも気になっている——。

ところで私が入院したら、家内と二人だけの暮しだから、家は雨戸を閉め、門には鍵をかけねばならない。

当分帰らないので、家の中を掃除することにし、掃いたり、拭いたりしていたら、上の入れ歯が出てきた。それで下の方を探し出し、BMホームへ届けようと思

ったが、見つけることが出来なかった。上の入れ歯だけ皿にのせ、仏壇のわきにおいてきたが――。

車椅子にかけたまま、床に視線をおとし、そんな思い出にふけっていると、私の名を呼んでいる大きな声を耳にした。

声のする方を見ると、廊下のはるか向うで、白い上張りのお医者さんが、こっちを向き、呼んでいるのだ。

あわてて車椅子から立上り、そっちへ歩いてゆくと、「大丈夫かな」とそのお医者さんが言った。

「少しは歩けますから」

その人について廊下を右に曲り、突当り、右側の、薄暗い部屋に入った。そこには若い二人のお医者さんがいた。

大きな、コの字型の、不気味な機械が、部屋のまん中にでんと坐っている。さっきのお医者さんが壁際の、籠をさし、「そのなかに眼鏡と、入れ歯を入れてください」といった。

それから踏台に上り、細長い寝台（？）の上に、仰向けになるように言った。二人のお医者さんに助けられ、幅の狭い寝台に横たわると、頭と脚の位置を度々直された。

「暫くのあいだ顔も、脚も動かさなくてください」

横たわった体の上に、大きな機械が徐々に降りてきた。顔のすぐ上（そう感じた）にきたとき、急いで眼を閉じた。物凄いい音が、脚の方で起きた。この大きな、不気味な機械が、私の病んだ口腔、喉、舌の出来モノなどを直してくれるのだろうか。次第に胸が苦しくなった。困難な病気にかかったことは家内を介護していると、きから感じていたが、診察室で、S先生の呟きが思い出された。「ねんまくがだんだん食われてゆくから、放射線で喰い止めなくちゃ——」喰い止める機械も不気味だが、この機械よりほか頼りになるものはない——。

ようやく、「終わりました。ご苦労さん」

という声を耳にした。

手伝って貰い、寝台から、踏台へ降り、それからスリッパをはき、眼鏡をかけ、入れ歯をはめたが、上と下を間違え、うまく入らない。はめるときも、外すときも

ひどく痛む。あきらめ、手に持った。

ふらふらしながら、受付にゆき、終ったから、看護婦さんをお呼んでくれ、と言った。

それから車椅子のところへ戻り、腰掛け、入れ歯をはめた。迎えにきた看護婦さんが廊下の向うに現われたとき、生き返った気がした。

二

十三階の、部屋に戻ると、ベッドに這い上り、手足を思い切りのぼし、大きな溜息を吐いた。

暫くして看護婦さんが、体温と血圧と脈搏を計りにきた。

私のベッドと、両隣のベッドのあいだには、明け閉め出来るカーテンがある。

三つ並んだベッドの、まんなかが私のベッドだ。

入口から向って右側で、左側にも同じく三つ。つまり六人の患者がいるわけだが、このなかで私が一番年上だ。